

第		23		回						
住	民	の	自	治	・	統	治	研	究	会
ご		あ		ん		な		い		

「大阪ボランティア協会」現地研究会の資料検討

-仁平典宏著「ボランティア」の誕生と終焉に登場-

と き:2013年12月26日(木)午後2時~4時

ところ:大阪自治体問題研究所会議室

3回にわたって行った文献講読、仁平典宏著「ボランティア」の誕生と終焉(贈与のパラドックス)の知識社会学に登場した大阪ボランティア協会の現地研究会のための準備として、協会の関連資料と依頼項目を検討する。

前回 2013.11.16 研究会の報告

文献講読(その3) - 仁平典宏著-「ボランティア」の誕生と終焉(贈与のパラドックス)の知識社会学-佃(第7・8章)・栗本(第9・終章)報告

1) 第7章 ボランティア論の自己効用論的転回 — 転換する:1970年代

1970年代に台頭した自己効用(贈与のパラドックス)の解決は、被援助者=「他者」のいない(教育)の意味論に適合的な(交換)の論理に。この論理が福祉に転位される時、当事者運動が突き付けた「他者性」とぶつかる。

2) 第8章 実体化する(交換)・忘却される(政治) — 1980年代

(1)1980年代、低コストのケアを社会的に提供する仕組=ボランティア的なものが労働やサービスを提供する資源として日本型生活保障システムの中に位置付けられていく。有償ボランティア、住民参加型福祉サービスなどの隣接概念が誕生する。

(2)ボランティア言説における(政治)や(運動)の位置は低下し、行為論・相互行為論的に語られる「活動自体の楽しさ」の言説となり、交換の意味論へと転換する。

3) 第9章「ボランティア」の充満と(終焉)-互酬性・NPO・経営論的展開:1990~2000年代

(1)互酬性の持ち込により、時間預託や有償ボランティアなどの外延をボランティアに取り込み、汎用性を拡大。

(2)NPOという言葉は、ボランティア以上に(有償/無償)の種別性を完全に無効化、(贈与)から(交換)へと拡大。

(3)政治的なものの隠ぺい - 普段は良好な関係でも、必要であれば敵対性を明確にし、追及や抗議を選択できること。政治の排除は、協働か、敵対か、の二者択一を迫り、どちらかに色分けする操作を伴う。

4) 終章 (贈与)の居場所 - まとめと含意

(1)動員モデルの限定解除 - ボランティア論は、自らの活動がどのような社会的/政治的帰結と接続しているかを問う基準を忘却。再び(政治)という問題系を取り戻し、動員に対する批判的な視座を持つことが重要。

(2)非権利領域の活動を法制度的に保障される権利領域に組み込む。制度に働き掛けて(贈与)を権利にする。

(3)(贈与)の領域を純粹贈与や交換へと性急に逃避せず引き受ける立場=何が問題かと反問を返すことを通じて、討議に開き、他者への問いを分有させいく権能が(贈与)の意味論には残されている。

《まとめと反省》

本書の言説を分析する方法論を十分に理解できたか。最終の議論でもボランティアとは何かの議論に終始した。改めて、序章「ボランティア」をめぐる語りと(贈与のパラドックス)一問題設定と方法を掲載し問い直しを図る。「ボランティアとは何か、どういう価値があるか」について、「これまで人々は何を語ってきたか」に注目する。ボランティアに関するメタ(高次の、超、言語を記述する言語=メタ言語)的分析。①いかなる政治的・社会的文脈で行われ、どういう帰結につながっているか。②ボランティアの言説において繰り返し現れるパターン(意味論形式)を抽出する。

当研究会は自主研究会ですので、参加者には資料代1回=500円の負担の協力をお願いしています。

主催=住民の自治・統治研究会 (06-6354-7220)